

の父親が当時の状況確認に来訪される。親はキツとした顔で帰られ、運命の別れ道、何とも申しようがありませんでした。親子の愛情、どれほど帰国を待ち望んでおられたか、つくづく感じられます。残された人生もあとわずかとなりました。日本人に生れて私は良かったと思います。

本籍 新潟県

現住所 新潟県三条市南四日町

## 私の抑留生活

石川県 今西三郎

私は抑留中入院しまして、退院後ほとんど病院勤務をしておりました。その体験をお話したいと思います。

日本へ帰ると言っただまされて、着いたところがシベリア。人影も何もない大荒野の囚人流刑地でした。だまされたショックは大きいですね。今後どうなるのか、大変心配もしましたし、またとにかく寒いのと腹が減るのにはまいりました。

一日の食事は、コーリヤンを原料とした赤いパン三〇〇グラム、自分たちは二〇〇ぐらいしかありませんでした。実も何もないスープで、とてもそれでは食べた気がしない。それで栄養失調になって、ばたばた倒れていきました。

作業へ出ていくにも、足が上がりません。やっと収直ぐつまずいて足が上がりません。やっと収

容所に帰ってきた友は、翌朝冷たくなって亡くなっていました。そんな状態がずっと続きました。ソ連では、熱がなければ絶対に休ませてくれませんでした。栄養失調は病気とは認めてくれないんです。頭が痛い、目がかすんで見えない、足がふらつく、そんなことではとつてもだめ。しかもマインス四〇度までは作業に出ます。飢えと寒さ、きつい作業、たまったものじゃありません。みんなふらふらになって、どんどん倒れていきます。そのうちに追打ちをかけるように赤痢が流行して、次々入院してゆきます。かわいそうになんと思つてたら、自分もやられました。ひどいさし込みを伴う下痢になる。体の中にこんなに水分があるかと思うほどドロッと出ます。何かとめる方法はないか。炭が水分を吸収させるのではないかと思つて、焚き火の炭をガリガリと食べました。外に方法はなかったです。一日三十回ぐらい、雪の上にしやがんで痛さに耐えました。痛いです。尻を出してるので冷えてきます。痛みと寒さ、とつ

てもたまらなかつたです。

しまいに出るものが何もなくたって、遂に何か膿のようなものに血が混じってきます。目も黄色くなってきました。これじゃもうだめだと思ひました。入院と決まりました。これで再び友と会うこともないだろうと思つて、また死んだら頼むぞ、帰つてこなかつたら頼むぞと別れを告げて入院しました。

入院したといつても、当時の病院というのは医者もおらず、薬一つないんです。ただ患者を一人所に集めただけ。そういう状態でした。自分が入った部屋は七十人収容の大部屋でしたけど、毎日三〜四人は亡くなっていきました。ひたすら痛みに耐えました。こんなところで死んでたまるか、絶対死なんぞと自分に言い聞かせました。

また、食べなければ死ぬ、一口でも食べて頑張りました。一人いた衛生兵が回ってきたので、何か薬があつたらとお願いした。「まあ、これしかないな」と言つて、一服頂きました。どうか効き

ますように。苦しいときの神頼みと言いますけれど、そのとおり。祈って飲みました。奇跡が起きたんです。二十五回、二十回と、日を追い込んだん痛みの回数が減ってきました。十五回、しめた、これで助かるぞ、光が明るくなりました。十回、五回と、とうとう奇跡的に痛みがとまり、下痢もとまってきました。

一カ月ほど入院して、それで退院することになりました。一カ月ほどの期間中に部屋から百人ばかり亡くなっていました。私の両脇に寝た方のうち四人が亡くなっていました。何の苦しみも見せません、いつの間にやら亡くなっています。衰弱死でしょう。ほんとにいつの間にやら、声一つ出しません。静かにいつの間にやら亡くなる。片手にパンを受け取りながら、そのままの姿で息絶えていました。

そういうような状態で亡くなっても枕元に名前の記載がないので誰だか分からない。とても考えられないことです。日本ならみんな枕元にも名前

が書かれてあるけど、名前の記載がないから、だれか分かりません。そのまま囚人が運んでいきます。明日は我が身の姿だと思うと、やるせない気持ちでした。ああ、死んでると、うつろに感じるのみでした。

退院した時に、病院勤務者を募ったので、これは収容所よりも病院のほうが食べるものがいいだろうと思うて手を挙げましたけど、まあ、びっくり、宿舎はテントです。枕元は氷になっています。これは下手なところへ手を挙げたなど。その時の作業というのは、炊事場の水の補給、ポイラー用のまきの伐採、患者の便の処理です。炊事場の水の補給は、囚人がタンク車で、川の水を割って運んでくるのをガンガン移し炊事場まで運ぶのですが、退院まもなくの体で大変苦痛でした。

あるとき入院患者が言いました。「窓からあなたを見ていたら、何であんな人が働かなきゃならんのか。今倒れるか、今倒れるかと思っってははらして見ている」と慰めてくれました。そうだった

たと思います。また、夜間の作業は寒いよりも痛いんです。針で突いたように、ちくちくと痛さを感じます。

また、患者の便の処理は、一斗桶に入れ天秤棒で担いで、病院前の空き地へ、ただどっと空けてくる。決まった場所はありません。空き地へただどっと空けてくるだけです。

しかもその便というのは、自分と同じ赤痢の患者の便、発疹チフスの患者の便です。防寒手袋一つで扱いました。当然汚れますが、洗うこともできません。雪でこすって落としました。また、捨てた便には菌がうようよしているはずですが、すぐ凍ってしまいますから菌も一緒に死ぬんでしょか。どうなっているかわかりませんが、でも、まあ、日本では考えられないような不衛生なことを平然とやってまいりました。

また勤務者用の便所は、土地の高低を利用して丸太を二本立て、それに横棒を渡して、それにまたがって用を足すんですが、落ちたものがだんだん

ん積もって凍ってきますから、ちょうどつらさを逆さまにしたような格好になる。そして尻につかえそうになると、つるはしで根っ子をガンとやる。五メートルほどの高さから、彩色豊かと申しますか、色とりどりと申しますか、氷の塊ががらがらと崩れてくるんです。まあ、シベリアでなければ見ることができない思い出の一つでした。

また、用を足しても紙がないのでふいたことありません。二年間ふいたことがないんです。また、ソ連人もふかないんです。あれはどういうわけか、食物の関係かふかないんです。自分としては初め気持ちが悪かったけど、慣れりゃ何とも思わない。環境がそのようだから仕方ない。

発疹チフスが流行してきました。病院勤務者は三十人ほどおりましたが、その中から四〜五人入院して、次々亡くなっていきました。私もかからなきやいいがなと思っていたら、またやられました。友は一生懸命冷やしてくれました。いつとき四二度まで上がったというんですけど、そんな高

熱あるもんかね。夢うつつの中で、今度はだめだろうと思いました。友が寝ずに冷やしてくれたおかげで、朝方には若干下がり、入院見合わせとなり、それから日を追い、だんだん下がって平熱に戻ることができました。再び死より脱出することができました。うれしかったので万歳しました。

作業するのも寝るのも同じ服です。枕元は凍っていますから、防寒帽も脱げません。防寒服を着たまま、防寒靴も履いたまま、毛布一枚あるでなしそのままごろりと横になり寝るだけ。シラミがおったなんて易しいものじゃありませんでした。下着の縫い目には何ミリの幅で上から下までぎっしり卵。外に一夜放っておいたけど、シラミは死ぬけど、卵には効果がなかったようでした。シラミがいたなんて易しいものではありませんでした。

それから、二月か三月ごろだったか、日本の軍医さんが一人お出になりました。軍医さんがいらしたけれども、薬がないからどうしようもなかった。

た。ある時盲腸患者が出まして、軍医さん、カミソリの刃一枚で手術された。内科のお医者さんだったけど、いろいろの病で亡くなった方がたくさん出たので、外科的なことをいろいろ勉強されたんじゃないかと思います。

今まで私が話したのはソ連に入って半年間の冬の、何もかも一番つらかった時のことです。腹が減ると寒いのと作業で、一番ひどかった時のこと、抑留されたシヨックもあるし、一番つらかった時、シベリアで亡くなった方の大半がこの半年間に集中していたものと思われまます。

春になって雪解けのころ、亡くなった人をどんなどころに埋めたのか、願い出て清掃に行きました。白樺林を抜けたところに土盛りがずっと向こうまで並んでいます。冬の間は囚人が一つ穴に五人ずつ埋めたと聞いておりました。その土盛りの数を数えてみると三百五十ほどある。既に少なくとも千五百から千六百人は眠っておられました。中には狼に荒らされたのもありました。幾つもの清

掃しました。また清掃に行くときには、亡くなった方をタンカで担ぎ埋葬しました。ソ連では亡くなった方は素っ裸にします。ふんどし一つ許してくれません。素裸とは何と情けない仕打ちと思いました。また冬の用意にたくさん穴を掘るのも作業の一つでした。

五月中ごろ、ようやく待ちに待った軍医が薬と共に来ました。これで死ぬことにならないと患者とともに喜びました。軍医が一番先に手がけたのはシラミ駆除でした。テント張りの洗濯場が建設され、大きな釜が用意されて、そこで患者の衣類の熱湯によるシラミ駆除、また乾燥場では熱風による駆除が行われ、これでようやくシラミとの悩みより解放されました。

また衣類を入れる前に入浴しました。シラミに荒らされた体に、じーっと浸み込んで痛く、全く息もできない状態。かきむしった体に赤い線が大きく盛り上がって浮かび、それを越えようと、あー結構だったなと思ひ、故郷の風呂屋さんを思い出

しました。それから時々入浴しました。終戦以来の入浴でした。

それから、洗濯勤務もしばらくしましたので、役得といえますか、時々入浴はできるようになりました。夏の終わりごろになって、食事もだんだん良くなってきました。また病室、炊事場、便所なども整備されました。病院らしくなってきました、亡くなる方も少なくなりました。

また自分たちも精神的にも、逆境にも耐えよ、いつかは日本に帰れるんだ、それまでくじけずに頑張るぞという気持ちにもなって、心もやわらぎ辛さもさほど感じなくなりました。

二度目の冬のときに再び入院しましたが、何の病気であったか、どうしても思い出せないんです。そんな苦しい目に遭った記憶はないんです。退院するに当たり、病院勤務も飽きてきたので一般収容所へ出ることにしました。一般収容所ではいろんな作業をしました。架橋、伐採、建物建築等いろんなことをしました。

また、いわゆるソ連の民主教育というのが始まっておりました。作業から帰れば輪になって赤旗の歌も歌いました。またインターナショナルも歌いました。またハバロフスク発の日本新聞というものが回し読みされました。日本の敗戦後の惨めな姿や記事を写真で見て、ああ、日本はこんなひどいことになっているのか、家もないのか、食べるものもないのか、故郷の方はどうなっているのか、みんな心配いたしました。また、自分たちの考え方は間違っていたんだろうかとの迷いも出てきました。このようにして民主教育といいますが、洗脳教育が始まって、だんだん盛り上がっていききました。

それから身体検査が始まって、それがなぜか女の軍医さん、軍医さんの前に裸で立つと、尻を見て健康判断するんです。聴診器は使いません。尻の皮をちよつとつまんでみて、そして一級から四級に分ける。一級、二級は重労働、三級は軽作業、四級は休養者というて、仕事は休みです。私は四

級でした。発疹チフスと赤痢でやせ衰えた体がまだ回復しておりませんでした。

そのうち四級の者ばかり別の収容所へ移されまして、そこでは一カ月ばかりだったと思うんですけど、作業がなく、毎日が野草を摘んだり、蛙を岩塩で炊いて食べたり自由な生活を送りました。再びそこで身体検査がありまして、その中からさらにやせた者が寄り出されて帰国が決定し、私はその中に入る事ができ、二年間で帰ることができましたが、一緒にソ連に入った友は四年間抑留され、また先年亡くなられた山田光義さんは、特務機関におられたがために故なき罪名をつけられて十一年間も抑留され、ご苦労されました。

わずか一週間の戦争なのに、六十万人が抑留され六万人が飢えと寒さ重労働に堪えられず故郷を偲び無念の思いを残し凍土の土とられました。シベリアは私にとっては忘れられないことばかりでした。